

京都市基本計画審議会 第3回すこやか部会  
摘 録

日 時：平成22年2月10日（水）18:00～20:00

会 場：こどもみらい館 4階 第1研修室

出席者：

おおまえ 大前	えみ 絵美	公募委員
かとう 加藤	ひろし 博史	龍谷大学短期大学部社会福祉科教授
しげた 繁田	まさこ 正子	京都府立医科大学大学院医学研究科地域保健医療疫学講師
すがはら 菅原	さとこ さと子	社団法人京都市私立幼稚園協会前副会長
たけした 竹下	よしき 義樹	社団法人京都市身体障害者団体連合会副会長，弁護士
たなか 田中	せいじ 誠二	学校法人大和学園学園長
つどめ 津止	まさとし 正敏	南区基本計画策定委員会代表，立命館大学産業社会学部現代社会学科教授
ながや 長屋	ひろひさ 博久	京都市PTA連絡協議会前副会長
にしおか 西岡	しょうこ 正子	佛教大学四条センター所長・教育学部教育学科教授
もとむら 本村	てつろう 哲朗	公募委員
やまうち 山内	いほこ 五百子	社団法人京都市保育園連盟常任理事

以上11名

○…副部会長

(50音順，敬称略)

## 1 開会

## 2 報告

### 第2回及び第3回融合委員会の結果並びに第2回部会の振り返り

#### 西岡副部長

森部会長に代わって本日の進行をする。報告案件として、事務局から第2回及び第3回融合委員会の結果を報告頂き、そのあと私が第2回部会の確認をする。

——（事務局から第2回及び第3回融合委員会の結果について報告）——

#### 西岡副部長

資料2「未来像のキーワードの分類」の「子育てしやすいまちにする」と「人材を育てる」とが融合する中で、「子どもを共に育む京都市民憲章」が反映されるような形になればと思う。すこやか部会の意見をうまく反映できるような形にしていきたい。

第2回部会に関しては、資料3を参照頂きたい。前回も十分な議論の時間がなかった。今回の「学校教育」と「生涯学習」にしっかりと時間をとりたい。特に御意見があれば伺うが、なければ、これからの議論の中で御意見を頂くこととする。

## 3 議事

### 分野別方針〈学校教育・生涯学習〉の検討

#### 西岡副部長

本日は、学校教育と生涯学習について、今後10年間の京都市の進むべき方向性について議論する。事務局から説明をお願いします。

#### 事務局（教育委員会事務局指導部長）から以下の資料を説明

- ・ 次期京都市基本計画検討資料（学校教育）

#### 西岡副部長

学校教育と生涯学習は非常に結びつきが深いので、続いて生涯学習について説明頂く。

#### 事務局（教育委員会事務局生涯学習部長）から以下の資料を説明

- ・ 次期京都市基本計画検討資料（生涯学習）

#### 西岡副部長

学校教育と生涯学習は結びつきが深いですが、どのように分けて論点を議論すればいいか。

#### 事務局（藤田教育委員会事務局生涯学習部長）

生涯学習の理念を広く捉えると学校教育も包括して生涯の学習となるが、ここでは主に、子どもを対象としたものも含めて、大人の育ち、学び、社会活動を軸に展開した。

#### 西岡副部長

それでは両方の議論を同時並行でいくが、先ず学校教育からお願いします。論点2にどのようなことが必要かを基本として、論点1を見て頂きたい。

先ず、資料提供頂いている繁田委員からお話頂く。

## 繁田委員

先ほど副部長がおっしゃったように、資料2を見て、あまりにも命とか体を守るという視点が融合委員会で挙っていない印象がある。第1回部会で話したキーワードとしてタバコ、そのつながりでアルコールや薬物依存も入るのだが、依存症時代を迎えており、生活習慣病の中でも特に対策が急務であるタバコ対策を目玉に入れるべきではないか。

論点2でも、「学力向上」と「規範意識の育成」というと漠然としており、効果が上がるかどうかは定かでない。タバコ対策は世界中で効果も上がっているし、絶対にキーワードとしても入れていくべきものだ。

この資料は私が10月の公衆衛生学会で発表したものだ。NPOを中心に、行政や大学、既存医療系団体が連携して進めているという意味で、京都の良さを表している地域でのタバコ対策の取組である。

大学生が参加してNPOが中心になって、体験型の参加型の防煙授業を行っている。「京都府下の体験型防煙教室実施校数」というグラフの通り、現在、京都市立中学の30校に出かけ、約3,000人の中学生に体験し考えてもらっている。理科離れとか自分で学ぶ力離れの対策として、自分から学んでもらう教室である。

これが実際にできたのも、京都市が大学生のボランティア活動やNPOと大学との連携に積極的であったからと改めて思う。このようにできているのは全国でたった一つ。

卒煙サポーター養成講座を開いてNPOが話せる人を養成している。タバコを吸っている子どもも、タバコ店の子どももいるし、学校の先生も吸っている中で、現代の問題の本質を捉えた説明ができる人を育ててきた。

京都禁煙推進研究会以外にも、エイズに関する2、3の団体と連携しており、やはり京都はこういう人のレベルも高いし、NPOのレベルも高い。

ただ、「19歳以下喫煙率」を見て頂くと、京都市立或いは府立の定時制高校で男性の32.3%、女性の31.7%が吸っているという状態だ。京都の市立中学でアンケートを取ると、中学1年は1%前後だが、これは学校に来てアンケートに答えてくれる子が1%ということで、中学3年になると5%ぐらいの喫煙率になってくる。それをゼロにする目標は非常に立てやすいと思う。また、京都市立学校は敷地内禁煙もできているので、吸い殻が全くない学校をつくることは、体の面でも心の面でも、学ぶという面でも大変有意義である。効果が世界中で確認されている分野なので、ぜひとも方向性の中に挙げて頂きたい。

「強み」「弱み」の中に携帯電話や薬物の問題は書いて頂いているが、携帯電話の保持率とタバコを吸う率に相関があるというのは厚生労働省の研究で出ている。薬物問題のゲートウェイ・ドラッグとしても、覚せい剤を使う子の95%はシンナーを吸ったことがあるし、シンナーを吸っている子の98%はタバコを吸っているという全国的なデータもある。だから、タバコ問題やアルコール問題を書かずに、携帯電話の依存や問題行動とか薬物問題を書くのは科学的にもズレがあるし、もったいない。

「政令指定都市の男性の喫煙率と女性の喫煙率」のデータは、国民生活基礎調査より計算したものだが、京都市の男性喫煙率40%はこれでも政令指定都市でいちばん低い。40%というのは世界からみると2倍以上で、イギリスが10%を目指していることからすると4倍も高いが、それでも全国的にはリードしている。女性の喫煙率は2001年ではワースト3だったが、色々な活動もあり京都も路上喫煙禁止条例をつくって頂いて17%まで下がってきている。20、20、17というふうに加減してきて、この勢いでいけば、心身すこやかな京都の突破口はここから開けるはずだという確信をもっている。ぜひともしっかりと目立つところに喫煙対策について入れて頂きたい。

「PM2.5値からみた」というデータは、世界中で一般的に使われているPM (Particulate Matter) 2.5  $\mu\text{m}$  (マイクロメートル) 以下の粉塵量ということである。京都のハンバーガーショップに学生が行って測定したのだが、分煙のところでも弱者には危険という40  $\mu\text{g}$

を優に越える数字が出ている。喫煙席にお父さんやお母さんが吸うから一緒にいる子どもをたまに見るが、大人でも倒れてもおかしくないような数字が出ている。ゲームセンターも  $40\mu\text{g}$  は優に超えており、カフェもおじいちゃんやおばあちゃんが孫にソフトクリームを食べさせている横で  $400\mu\text{g}/\text{m}^3$  が出たりしている。生涯学習の方につながるが、子どものことを考えると社会はどうあるべきか。大人の健康にもつながるかと思う。

禁煙席ありの飲食店は京都が日本一多いという記事が1月19日の京都新聞の1面に載った。これでも他都市に比べると進んでいる。京都で禁煙店を探して入るのはそれほど難しくないが、よそではかなり難しい。神奈川県が受動喫煙防止条例を4月1日から発効されるが、本当は京都の方ができるはずだ。もっとみんな健康になれる、心筋梗塞を減らせるということで、学校教育、医療・保健にキーワードとして入れてほしい。

タバコは、医学的には明らかに命に関わる物質としてダントツである。「放置できない問題」にぜひ確実に入れて頂き、「克服すべきもの」にも入れて頂き、「強み」には、タバコフリーキャラバンという素晴らしいことが京都で行われているのだ、これは京都だけしか行われていないのだということを入れて頂いて、ぜひ融合委員会で言って頂きたい。

### 西岡副部長

「放置できない問題」にタバコ、アルコール等も入れる、「基本方向」のところへ「命」を、ということだ。「子どもと共に育む京都市民憲章」の1番は「かけがえのない命を守ります」で、命がきちっと押さえてある。そういう点でも、学校教育にも生涯学習にも「命」、それから生涯学習に「大人の健康と学習」を入れて頂きたい。

### 繁田委員

大人も常に学習していかないと。私たちが子どもの頃の大人は、みんなタバコを吸っていた。2010年だから勉強しなければいけない。子どもたちから親にうまく発信できるということもあるので、完全に生涯学習の中に入ってくる。

### 西岡副部長

大人が、大人の健康、大人の命を守るということを学習する。学習方法としては参画型ということや、NPOの方法で人材育成や人材養成、これは生涯学習の基本方向のところに入るかと思う。学校教育のところは、京都の強みでもある。NPOを含めた様々なところが連携し、より一層進めていくことを提案頂いた。全国的な問題がたくさんあるが、学校教育も生涯学習も京都は先駆的、先進的な取組を進めている。「政策の基本方向」として今後10年間外してはいけないことなどどんどん挙げて頂きたい。

### 加藤委員

命の教育というのはもちろん重要だ。IT情報のことが挙げているが、これは命の教育とのバランスで考えるべきで、IT情報そのものは目の敵になるようなものではない。バランスが崩れているのは指摘のとおりだろう。

6点、触れたい。

1点目は、学校教育の中で老いの問題が挙げてきていない。この部会でもデス・エデュケーションの話も含めて指摘があったが、老いから子どもたちが学ぶ命は非常に大きい。例えば、高齢者に子どもたちがインタビューすることも教育に取り込めるのではないか。

2点目は、規範を学ぶとは、ある意味で一種の逸脱も含めて学んでいく必要がある。様々な共同体感覚を身につけるには遊びというものが非常に大事だ。私自身大いに遊んで育った。遊びの時間と空間と仲間、俗に「三間」というが、これはアナーキーな空間が求められる。10歳、11歳頃はギャングエイジと言ったりロビンソン・クルーソー期と言って冒険

をする頃ですが、そういうものをもっと意識的に仕掛ける必要がある。

3点目は、教育全体がマニュアル化している。トライ&エラーの学びがないと駄目なのではないか。ボランティアが減ってきている大きな原因でもあると思う。

4点目は、親の教育。我々は親の人生の苦渋や辛酸を背中から学んできた。もうひとつ踏み込んだ関わりをサポートする教育が必要ではないか。

5点目は、人間観とか世界観を培う教育。

生涯学習で6点目として。知的障害者も含む障害者の生涯学習、ディスアビリティのある方々の生涯学習、この点をぜひ押さえておいて頂きたい。

## 西岡副部長

「活かすべきチャンス」が「放置できない問題」をカバーしていくと思う。「活かすべきチャンス」を如何に活かすか。その辺りがうまくできるように考えて頂きたい。

## 大前委員

お年寄りの生き甲斐対策として、老人憩いの家や老人クラブハウスなどの対策をされているが、なかなかお年寄りには結びつかず、実際に参加しても入り込むまで時間がかかる現状がある。お年寄りに子どもたちがインタビューして子どもたちが学ぶなど、お年寄りが子どもたちにできることは大きいので、今後お年寄りが増えていく中で有効だと思う。

「学校教育」の資料に「幼児教育がすべての基本であることの認識」とあり、本当に実感する。幼稚園から、小学校、中学校、高校と続いていくが、子どもたちは日常生活の半分以上の時間を学校で過ごす。その中で「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育てるにしても、学校や保育園などの場だけに託すのは親として責任を感じ、何とかできないかと考えている。「確かな学力」は学校に任せて、「豊かな心」と「健やかな体」は、教育の場を平等に与えられた中で、その部分を伸ばしていくのは私たち親の役割ではないのか。

「シンケンジャー」というテレビ番組で、馬に乗って刀で悪役と戦う場面を見て、子どもが「あっ、馬に乗りたい」という。これも自然とのふれあいにつながるし、剣道を習うことが子どもの目標になっている。剣道を教えることで、子どもも体を鍛えるためにはよく寝て、よくごはんを食べて、保育園に行く、そして自分で体をつくるということを自覚して目標になっていくことにつながっている。そういう部分では親が関わっていくことが大切だと感じた。

学校教育に対して、食育・道徳・性教育は学校の中で義務化がされているのか、もし義務化されているとすれば内容は、と質問したが、その答えのなかで驚いたのは、「学習指導要領において、「家庭」の時間の中で食生活や栄養、地域の食文化、調理などについて学習することが定められている」とあった。当たり前なことだ。見ることで気づかされるということがある。「子どもを共に育む京都市民憲章」は、当たり前なことなのだが、確認するという意味ですごく新鮮だった。教育においても、当たり前なことだが家庭の役割を明記することは有効ではないか。

## 西岡副部長

「子どもを共に育む京都市民憲章」は大変評判がいい。この周知も課題になっていいか。

## 事務局（藤田教育委員会事務局生涯学習部長）

「子どもを共に育む京都市民憲章」は、子どものために大人が何をすべきかということで3年前に制定した。出来上がったときには平凡な表現のように思えたが、それが本当にできているかと問いかけてみると、できていない。先ず大人がどうかと考えると、非常に重要な意味をもっていると実感している。

ただ、そのことが市民の方に広がらない。学校教育関係者や子どもたちの健全育成に関わる方には一定浸透しつつあると思うが、その他の方々には、子どもの問題だから関係ないという意識がある。子どもに関わっていない市民は一人もいないという観点で、社会ぐるみで子どもを育てるという意味で、この憲章を先ずは知って頂き、理念を理解して頂いて、できることから実践をして頂くことを課題と感じて取組を進めている。

### 西岡副部長

高齢者の生き甲斐について、「強み」に「学校ふれあいサロン」が書いてない。「学校ふれあいサロン」を活用し、社会福祉協議会の健康すこやか学級事業として、地域の学校で高齢者が集まって、そこに小学生や大学生などが入って交流を盛んにしている。「強み」に入れるといい。世代間交流をもう少し進めていくという点を方向性として押さえていただきたい。

### 菅原委員

資料を見ると、学校教育は当然小学校以上と受け取られる。「克服すべきもの（弱み）」に2行だけ「保育園・幼稚園から中学校まで連携した子どもの育成」と書いてあるが、本当に基本的なところはやはり幼児教育だと思っている。

京都市立幼稚園が統合されて11園が3園になったと書いてある。背景には少子化があって、先を見据えての減少と思うので、ひいては私立幼稚園にも影響してくるだろう。京都の中で大きく幼児教育を担っている私立幼稚園を考えたときに、もう少し学校教育の中で一般の市民に見える方法はないか。「弱み」のなかにちょっと書かれているのではなく、この弱みをどうしていったらいいのか。

タバコの問題も、子どもたちを通して親に伝えると効き目がある。他のことでも、学校教育の中に幼児教育のことを盛り込み、一元化も含めて市民の取組をして頂きたい。

### 西岡副部長

「学校教育」の「克服すべきもの（弱み）」の「保育園・幼稚園から中学校まで連携した子どもの育成」について事務局から説明を。

### 事務局（清水教育委員会事務局指導部担当部長）

小学校区単位での保育園・幼稚園との連携は、交流であったり、授業を見に行ったりと進んできているが、それをさらに中学校区単位に広げてできないかと取組を進めてきている。ただ、中学校区となると、保育園・幼稚園の数が非常に多かたり、逆に少なかたりという差があり、十分な連携ができているとはいえない現状である。もう少し組織的に保育園連盟、私立幼稚園協会、小学校と連携しながら拡充できないかということで挙げている。

### 菅原委員

保幼小中の連携自体は存じ上げている。幼稚園が学校の中に含まれていることを皆さんご存じでないので、もっと前面に出して頂きたい。

### 山内委員

保育園も同じ思いでいる。

最近ファストフードなど味が均一化して、一つずつの素材の味がなかなか子どもたちに伝わっていかない。幼児期から均一化された味に慣れるのではなく、家庭の味を味わってもらいたいが、外食がかなり見受けられる。命をいただいている感謝の気持ちも含めて、

京都市で育成している食育指導員の活動を大きくして行って頂きたい。「活かすべきチャンス」の「産学公の連携」に「日本料理アカデミー等との連携による食育」とあるが、各業種の方々にも積極的に入って頂きたい。

「小中学生の携帯電話への依存や問題行動」とあるが、ゲームによるバーチャルな世界の中で子どもたちが遊んでいる。脳への影響は大きいと思う。生涯学習のところに「実体験を伴わないバーチャルな世界の氾濫」とあるが、小さい子どもの方が重大な影響があると思うので、学校教育、そして幼児期からもっと深刻に考えていくべきだろう。

## 西岡副部長

京都の強みでもあり、親の育ち、家庭の生活習慣、家族の絆というところにも深く関わってくるだろう。

## 長屋委員

幼児教育についてわずかしか書かれていない原因は、教育委員会と保健福祉局という二つの行政が同じ世代の子どもたちを担っていること、また、テーマにも「学校教育」と「生涯学習」、さらに「子育て支援」があって、包括した施策が出せないことにあるのではないか。子どもたちを育むビジョンを京都市は一元的にもつべきだろう。国会でも幼保一元化は進んでいないが、克服すべきものとして、京都市で何か新しい取組ができればいい。

「生きる力」に対しては、京都市民全体で解釈を共有できていないだろう。番組小学校ができた時期は、子どもたちを育むビジョンに京都市民全員が同じ解釈をして進んでいたのではないか。今は多種多様化してバラバラになっている。ある私立幼稚園の園児数が減ってきた。その原因の一つは、どうやら読み書きを教えないことらしい。未就学児、幼稚園児に本当に必要な教育とは何なのかを今の保護者が理解していない一例だろう。

「生きる力」というキーワードを本当に京都市民のみんなが理解しながら、子どもを育む環境の大切さも理解しながらやっていく必要がある。保幼小中の連携も「生きる力」というキーワードで一本芯を通して、高校まで含んで子どもを育むビジョンを共有しながらやっていくべきだろう。公私間の壁などあるようにも思う。

## 西岡副部長

幼保一元化を言っているうちはまだ難しい。子育て一元化、保育一元化という言葉になるぐらい、子育て省が欲しいという話があった。京都は先駆的に様々なことが行われているので、10年後に目指す姿として検討していきたい。

## 田中委員

「豊かな心」や「規範意識の育成」として、公德心や京都を愛する地域愛、環境保全の意識の育成が必要かと思う。環境教育は生涯学習の体験の中にも必要だろう。子どもたちが命を大切にする、また自分を大切にする体験の中で、地域を大切にして自らが京都ファンになっていく、そして京都のために仕事や学びを通じて公に資する、自ら行動する。地域の様々なセクターの連携の下で、子どもたちに対するそういう教育、指導、啓発に取り組んでいくという方向性があってもよい。

食育について、日本料理アカデミーは日本料理の店舗が中心である。日本には和洋中、フュージョンの料理があり、各料理分野に業界団体があるので、食に関する他の団体との連携による食育をやっていくのがいい。日本料理アカデミーだけでは人材に限られる。それを補うのが食育指導員の育成だが、食育指導員を増やす観点からも連携はいい。

地産地消の献立は取り組んでいるだろうが、給食を教材とした食育の強化も望まれる。

## 西岡副部長

京都愛や公德心という点では、もう少しそういう言葉で挙げていくことも大事かと思う。

## 竹下委員

日本弁護士連合会の今年の人権大会のテーマの一つに「子どもの貧困」が決まって、この10月に向けて取組をしているが、子どもにとって貧困とは何なのか、あるいは豊かな心というけれど豊かな心とは何なのかについてももう少し議論が必要だ。我々も子どもが貧困なのか、社会が貧困なのか、貧困によって子どもがどういう状況に置かれているのかという議論をしてきた。貧困にせよ、豊かにせよ、共通認識にするためにももう少し掘り下げた議論や整理が必要だろう。

また、例えば、バーチャルから抜け出せないとか、携帯電話云々とか、先ほどからの議論が、大人が上から子どもを見ているようで気になる。石川県は条例で子どもに学校へ携帯電話を持たせないと決めているが、それはどうかと思う。一方で、奈良県で子どもの安全のためにGPSを組み込んだ携帯電話を持たせろという議論をし、或いは携帯電話を通じて情報提供までやろうとしている。

子どもたち自身が、ゲームや携帯電話から学び取っているものを私たちは否定していいのか。マイナス面だけを強調しているが本当にそうなのか。見落としてならないのは、子どもの目線、子どもたちが主人公ということだ。

子どもたちの夢は、環境との関係でしか絶対に育たない。社会の環境が今どうなっているかによって子どもたちの夢もそこに育まれるし膨らむ。ゲームや携帯電話が社会に充満している情報や環境の中でしか夢を描けないことを前提にして議論すべきだ。

## 繁田委員

日本では思春期教育という分野がなかったのではないか。世界の思春期教育は本人たち中心である。大人社会の弱点を教えて、大人も変わろうとしているが、君たちも変わってほしいという切り口でやっている。タバコでは、大人は吸ってもいいが20歳以下はダメと言われて余計吸っていたのを、「君たちが決めるものだ、どう思うか」と問いかけるようになった。文科省主導の硬直した教育が日本ではまだまだあるが、京都は文化的にも学問的にも進んでいる。大人たちが中心に取り組む教育が大事と基本方向に入れてはどうか。

「学校教育」の「学力向上・指導力向上」のところに、指導力がどうのとか、不適格教員がどうのとあったが、今、子どもたちの生活が多様化していて、携帯電話の問題一つとっても大人も答えが出せない。現代のニーズに柔軟に応じた教育が京都の目指す教育だと入れてもらわないと、あれはダメ、これはダメということでは、現代社会から見たらできないことになってしまう。「きをつけ」「前にならえ」「そこ、何しているのや」「黙っとれ」みたいな先生方もまだまだたくさんいるので。

今の子は表も見ないしグラフも見ないし計算も嫌いである。日本では全然ないが、目に見える柔軟な教材、思わず読んでしまうような教材は、米英では40年も前からある。思春期の教材やエイズの教材でも30~40種類もあるのに、日本では固いものしかない。年代に応じて学ぶ当人が満足できる教育が大切である。柔軟な教材、教え過ぎない教育が大事だ。

もう一つ、子どもたちが変われというなら、大人も変わらないといけない。日本だったらタバコは楽しげに自動販売機でガンガン売られているが、シンガポールのタバコには流産して死んだ赤ちゃんの写真がある。大人も変わろうとしている。当然である。学校教育は子どもだけとか中高生だけにならないようにして頂きたい。

## 西岡副部長

成人教育は生涯学習で非常に大切である。また、現代社会の実態から乖離しないような教育、子どもの主体性を生かしていく教育をpushしておくとの指摘だった。

関連する「強み」として、学校教育や生涯学習について教育委員会等が実施しているものがあれば紹介いただきたい。

#### 事務局（藤田教育委員会事務局生涯学習部長）

生涯学習の中には明確に子育て中の親をどう育てていくかという概念を入れており、それが家庭教育につながっている。まず、家庭がどう変わり、そのために親の意識をどう高めるのかを就学前の段階を担当する各部局に広めることで、子どもの育みを共有していけると考えており、親支援プログラムを、保健所、保育所、幼稚園等々と連携して進めている。

また、バーチャルの問題などは生涯学習の問題ではないとの意見があったが、親が意識していないことが子どもに影響を及ぼしているという意味で、生涯学習に入れている。

携帯電話についても、頭から否定しているのではなく、子どもがどう使っているかという実態を親や大人が知らなさすぎることを問題としている。教育委員会としては、インターネット教育はパソコンで十分対応できるとして小中学生に携帯電話は必要ないという方針を出しているが、それでも持たせる場合には親にも学習してもらい、携帯電話のプラス面とともに危険性を十分知って、子どもの利用実態を把握して頂くよう啓発を図っている。

#### 津止委員

学校教育や生涯学習で、子どもたちや市民がどういう力をつけていくのかという議論が必要だろう。学力や体は一定評価が可能だが、心はどういう評価軸で議論したらいいか難しい。大学でも「確かな学力」と「豊かな個性」というが、豊かな個性とは何かと議論した結果、課外自主活動の力も含めて大学の教育内容としようとしている。そうすると、マネジメント力とか、チームワークを形成する力とか、リーダーシップの発揮力などが大事となる。即ち、つながる力ということで、学校教育の分野でも生涯教育の分野でも、人とつながる、他者と連帯するといった話になる。

子どもの貧困の話にしても、子どもたちがつながる他者を奪われている、つながる力をなくしている側面がある。テレビでも「無縁社会」ということが非常にインパクトをもって放映されている。社会的な孤立の状況が大人のみならず子どもたちにも広がりつつある。本当に孤立感が深いから、バーチャルな世界がウエイトをもつのだと思う。

他者とつながる、社会と接点をもつことを、どう学校教育の分野や生涯学習の分野でプログラミングするかがテーマだろう。そんな前提が前提でなくなっているところに今日の不気味さみたいなものがある。

南区の策定委員会における、南区の地域自慢の調査で東寺が1番だったが、地域の人たちとの付き合いがある、地域がにぎやかだ、地域の誰かが声を掛けてくれる、そこが自慢だというのが2番目に挙ってきて驚いた。

みんなとつながっていくということが教育の力として大事にされなければいけない。他者理解や多文化共生などを学校の教育や生涯教育として教える場合にどういったメニューがあるか。それをつながる力の形成と打ち出したときにインパクトがあると思う。今の時代のなかで最も強調されるべき内容ではないか。

#### 西岡副部長

つながる力もしっかりと押さえていきたい。

#### 加藤委員

クリエイティブな人材、或いは共感力を持った人材を育てることを目的として明確に打ち出す必要がある。「子どもの権利条約」のポイントに、「Own View」という子どものオリジナルな考え方や見方を形成する権利がある。そうしたオリジナルな意見或いは

個性みたいなものもその目的に入れられるかもしれない。

また、いわゆる耽溺、嗜癖、依存は様々なところにあり、アディクションを全体的に捉える必要がある。一つの耽溺をやめるとほかの耽溺が出てくる。なぜ、携帯電話に依存するかというと、やはり夢や希望がなくなっているからだろう。子どもたちに夢や希望を。大人の夢や希望とも相関するがやはり原点ではないか。

それから、地域活動をしている役員の高齢化を各地で見るが、地域活動へのリクルートを意識しつつ、PTAと地域活動の連携をもう少し開発していく必要がある。

最後に、生涯学習のところで、夜間学校も大事なポイントになる。夜学校のことを社会全体で考えていく必要がある。

## 菅原委員

子どもが予期しないところで色々な環境が設定されたときに、子どもがどう対応するのかという臨機応変さ、そういうものが生きる力につながると思う。考える力、臨機応変に対応できる力が必要だとどこかに書いていただければありがたい。

## 本村委員

京都には寺社仏閣がたくさんあって、お神酒やお祭りのときの振る舞い酒、不幸があったときまで、日本人はお酒を飲むということが身近だ。性教育は小学校のときにあったが、小中学校でお酒の話はまったくなかった。京都はお酒の生産量も兵庫に次いで日本で第2位という大きな酒どころである。

兵庫で食育に力を入れて学校で料理の話をして一生懸命頑張っている料理人の友だちがいるが、その彼もお酒について学校で話をするのはタブーで、言っではいけない雰囲気らしい。フランスのブルゴーニュというワインの産地では、258校ぐらいの小学校でワインの勉強をする。地域の産業振興とお酒の知識を入れるという意味で力を入れてやっている。

京都はフランスと芸術や文化、食文化に非常に似通った部分がある。日本には麹文化があって、味噌、醤油、酢など、古い蔵元が京都にはたくさんある。石野さんだったら220年、千鳥酢さんだったら250年など歴史もあって、そこには小学校や中学校から話しにきてほしいと依頼があると思うが、400年とか300年の歴史があり、文化と言ってもいい伏見の酒蔵の蔵元と話をすると、そういう依頼はないという。

小さな頃からフランスのように教育をして知ってもらうことが非常に大切だと思う。そういう教育の話はまったくないと聞くので、ぜひ京都の教育委員会に、特に伏見とか京都の酒どころの話をカリキュラムに組み込んで、それが健全な育成や食育に用いてほしい。

室町時代に洛中で350軒ぐらいあった蔵が今は2軒しかない。江戸時代に伏見に移った蔵でも24〜25蔵ぐらいしかない。10年後には大半がなくなって、文化がなくなったみたいになるかもしれない。そういう部分を全部リンクして盛り上げていくようにしてほしい。

## 西岡副部長

学校教育においてだけではなく社会教育という点でも京都ならではの特色を出した教育が必要ということで、今後重要なことだと思う。

論点3、論点4で、特に行政が行うべきこと、市民が行うべきことについてご意見をお願いしたい。同時に、10年後の姿としてこういうものを置いておくべきというのがあればお願いしたい。

## 竹下委員

生涯学習を行政がやることは大事だし、そのための環境づくりや条件づくりは当然だが、民間、任意団体、場合によっては町内会でも学区社協でもいいが、そういう存在は生涯学

習を行っている。それに対する支援体制を考えないとダメだと思う。地域の崩壊とか地域力というが、生涯学習を前進させようとするときに、地域力も進歩するし、地域づくりにもなる。生涯学習を担うのは行政や公民館だけではないということが益々大事だろう。

#### 長屋委員

例えば、学校教育における行政と市民の役割分担が大切だ。一般の保護者は、教育は行政サービスの一環であってやってもらうものとの感覚がまだまだ強い。市民が子どもたちを育める環境をつくるなど、保護者も市民として一緒にやっていく必要があるとつくづく感じる。そういうことを10年後に向けてもう少し共有化をしていかないといけない。

これは生涯学習などについても同じだ。自治会の組織でも、している人はしているが、他の人はどちらかというやりたくないのが実態だ。PTAもやり、消防団もやり、少年補導もやるなど、やる人は本当に限られている。みんなで役割分担して、誰かが何か社会の中の一部を担えるような仕組みができると、子どもの教育環境もまちも良くなる。

#### 田中委員

生涯学習では、学校や地域や大学や専門学校や民間の学校等を含めて様々な取組がされている。観光に観光案内所があるように、コンシェルジュ的な生涯学習案内所があればいい。どこか物理的に設置されるのか、或いはWeb上かわからないが、行政が各層で取り込まれる生涯学習のメニューの案内を一元化し、いつでもどこでも簡単に情報や申し込み等ができるようなステージ或いはプラットフォームができればいい。

#### 繁田委員

この部会で改めて皆さんと通じていることが多いと感じる。縦割りで、医療は医療、保健は保健、保育園は保育園となっていたことで、同じ問題を思いながら練れていない。行政はまさしくマネジメントなので、このような委員会的なものを保持して頂きたい。

また、行政にやってもらうとすると、それなりのお金の配分の問題がある。横のつながりを持ったうえで、科学的にきちんと結果も出て、しかも証明されているものに大きなお金を出すなど行政にはメリハリをつけてほしい。逆に、私たち民間や市民を縛って、こうしなさいと言われると困る。やる気もなくなる。少年補導や交通安全、体振の委員をやったが、身動きがしにくく長続きしなかった。自由度、やっている人に好きにやっていいよと言ってもらう、この予算を好きに使っていいよと言ってもらえると、盛り上がると思う。

#### 西岡副部長

横の連携がうまくとれるように、それがうまく機能するよというの論点4の10年後のあるべき姿だと思う。時間の関係で発言が不十分だと思うので、この会議のあとで、事務局に意見を寄せて、発言を補っていただきたい。また、第5回は出来上がった案に関して議論いただくので、そのときにも意見を言っていただく機会がある。

本日の議論はこれで終わることとする。次回は「障害者福祉、地域福祉、高齢者福祉」についてご検討を頂きたい。

——（事務連絡）——

#### 4 閉会